

養育里親における学齡前と学齡以上の里子に対する日常生活への配慮

松山 郁夫*

Support of Daily Life for Preschool-Age and School-Age and Beyond of Foster Children in Nurture Foster Parents

Ikuo MATSUYAMA

【要旨】本研究では、養育里親における里子の日常生活への配慮に対する認識を明らかにすることを目的としている。養育里親を対象として、里子の過ごし方への配慮に関して意識する度合いを問う、独自の質問を記載した無記名方式の質問紙調査票による調査を実施した。養育里親として子供を養育した年数が5年以上あり、且つ全質問項目に回答している148名の質問紙調査票を有効回答とし、分析対象とした。各質問項目について、「学齡前の里子の養育経験がある」、「学齡以上の里子の養育経験がある」、「学齡前と学齡以上の両方の養育経験がある」の3群ごとに、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について、各郡間で平均値に差があるかどうかを検討するために一元配置分散分析を行った。その後、最小有意差（LSD）法によって多重比較を行った結果、養育里親は、里子の日常生活への配慮に対して、学齡前か学齡以上かに関わらず、里子に対して、健康に生活すること、対人関係を大切にすること、充実した生活をするということについて配慮するように心がけていた。しかし、里子が学齡以上の場合、学齡前よりも、時間を守る、できることは自分でする、ルールを守るという自立に向けた行動を重視していることが示唆された。

【キーワード】 養育里親、里子、日常生活への配慮、学齡前、学齡以上

I はじめに

これまで日本では、里親制度の意義と厚生省（当時：2001年1月より厚生労働省）統計調査から見た里親制度の実態（瀬下, 2000）、専門里親と親族里親の実態と課題（澁谷・才村・庄司・小山・斉藤・安藤・有村・伊藤, 2004）、里親の意識にみる特徴から里親制度の啓発と普及（木村, 2007）、里親制度等の状況を踏まえた社会的支援（山縣, 2011）等、多様な観点から、里親制度の課題に関する報告がなされている。

1972年から今日にかけて継続刊行されている「里親だより」の全号を資料として、同会の活動を分析した研究では、「①全国里親会は集会活動、行政への要請活動、情報発信活動、普及啓発活動、調査研究活動等の活動を連関させながら教育福祉的な里親支援活動を形成している。②その支援活動は、支援に対するアプローチの違いから1971年から2001年、2002年から2011年、2012年から今日までの3期に区分される展開を経ていた。③各時期で「指導」・「共有」・「媒介」という支援に対するアプローチの特

*佐賀大学教育学部

徴がみられた」(二村, 2022)と述べられている。全国里親会の活動内容と変遷、支援に対するアプローチには特徴があることが窺える。

地域里親会の課題については、「会員数の停滞と活動の不活性化、活動内容・方法と周知に関する課題、費用面の課題、関係機関との関係・連携に関する課題、里親支援に関する課題の5項目がある。地域里親会のみで解決することが難しい課題も多く、地域里親会、行政機関、児童相談所等の関係機関が里親支援チームとして、互いの状況を把握し、課題を整理・検討することが、地域里親会のさらなる発展や効果的な役割遂行につながる」(石井・富田・波川, 2021)と報告されている。また、これらの5つの課題に加えて、「里親には重層的な支援が必要である。里親のニーズを研修内容に組み込み、里親の意見が反映される環境を整え、相談できる窓口を複数設けるなどして幅広いサポートをすることが必要である」(佐藤・松澤, 2017)と主張されている。そのため、里親に対する様々な支援の充実が求められていると言える。

これらの状況のなかで、「里親は養育の場で生活をしており、里親にとって里親をすることは生活の営みであり、生き方である。里親たちは子供とは家族であるという認識を持っている」(三輪, 2020)。家庭の中で里親という特定の大人に、個別に愛情を受けて養育を受けることに関しては、「被虐待や実親との離別体験による傷つきからの回復、侵害された権利の回復を図るうえで有効であり、効果がある。里親にとっては、子育ての方針が明確であれば、子供との信頼関係を構築することが子育ての自信にもつながるばかりでなく、再度里子を養育したいという意識も向上する。しかし子育ては悩みや心配事など様々な要素を含んでおり、里親へのサポート体制は不可欠である」(米山, 2022)。「わが国の養育里親の多くが、受託中の里子を自分の家族の一員であるとみなしている」(大日, 2020)。これらのように現在の里親の意義や存在価値等について言及されている。

武漢を起源としてパンデミックとなったコロナ感染の拡大の中で、「①里親支援専門相談員の活動が低調だったのは、子供の感染リスクへの配慮が優先されたから、②半数以上の里親が養育に良かったと思えることを見出しているのは、普段どおりの日常も良かったと思えることとしてとらえる里親が存在しているから、③受託児の対応に困ることがあったと回答した里親のすべてが相談につながっているわけではないのは、自身の不安やストレスについて、児童相談所の職員や里親支援専門相談員には相談しない傾向を有しているから」(井上・笹倉, 2022)と、コロナ禍における里親支援専門相談員と里親の状況について述べられている。

どのような社会状況においても、養育里親における養育態度が里子の成長・発達に影響を及ぼすため、日々の暮らしの中で、養育里親には、里子の気持を押し量りながら適切な配慮をしていくことが求められる。その際、ライフステージが異なる場合、つまり里子が学齢前、学齢以上において、配慮することに違いがあることも考えられる。そのため、養育里親が里子に対して、学齢前か学齢以上かのライフステージの違いを捉えた上で、各々にどのような配慮を心がけながら養育をしているのかが明らかになれば、里子の生活の質をより高める支援を考えるための一助になるものと考えられる。

以上より、本研究の目的は、養育里親における里子の日常生活への配慮に対する認識について、里子が学齢前か学齢以上かのライフステージの違いを考慮した上で明らかにすることである。

II 方法

1. 調査対象

本研究では、養育里親を対象として、里子の過ごし方への配慮に関して意識する度合いを問う、独

自の質問を記載した無記名方式の質問紙調査票による調査を実施した。質問紙調査票では、回答者の性別、年齢、里親の種別、里親として子供を養育した年数、これまでに受け入れた里子のライフステージ（乳児・幼児・小学生・中学生・高校生以上）の人数について質問した。

公益財団法人全国里親会の会員である 66 か所の各都道府県指定都市の里親会に所属する里親とした。無記名で独自に作成した質問紙調査票を郵送により各 10 部配布し回収した。合計 299 名から回収された。それらのうち、養育里親として子供を養育した年数が 5 年以上あり、且つ全質問項目に回答している 148 名の質問紙調査票を有効回答とし、分析対象とした（有効回答率 22.4%）。

分析対象者は、男性 44 名（29.7%）、女性 104 名（70.3%）、年齢は 30 歳から 80 歳で、平均年齢 55.0 歳（SD 8.9）、里親の経験は 5 年から 38 年で、平均 8.7 年（SD 7.8）であった。

2. 調査期間と調査方法

(1) 調査期間

平成 29 年 1 月 17 日より同年 3 月 17 日までの約 2 か月間とした。

(2) 調査方法

公益財団法人全国里親会の会員である都道府県指定都市の里親会 66 か所に、独自に作成した無記名方式の質問紙調査票を郵送にて配布し回収する方法にて実施した。各里親会のサロン等の会合時に質問紙調査票への記入を依頼した。33 か所（送付した里親会の 50.0%）から回答が得られた。

(3) 倫理的配慮

質問紙調査票を郵送した都道府県指定都市の里親会に対して、書面にて本研究の目的、内容、回答への記入は無記名で行うこと、回答は個人を特定できないようにすべて数値化して集計するため、里親会名は一切出ないこと等を説明し、同意を得られた場合のみ回答を依頼した。回答をもって承諾が得られたこととした。

3. 質問項目の作成手順

本研究では、里親における里子の生活への配慮に対する認識を検討するための先行研究がないため、独自の質問項目からなる質問紙調査票を作成する必要がある。

調査対象となる里親は里子が健やかに成長するように、日々の過ごし方に様々な配慮をしながら養育をしている。社会的養護の視点から家庭養護を担う里親には、福祉的な役割が求められる。それ故、福祉の立場から、知的障害と自閉症を有する利用者の日常生活を支援している障害者支援施設の生活支援員に対して、利用者の過ごし方への配慮に対して意識する度合いを問うために独自に作成した 35 項目の質問項目（松山, 2017）を使用できるのではないかと考えた。しかしながら、そのうち以下の 4 項目については、その文言を修正する必要がある。具体的には、「利用者同士で交流する」を「子供同士で交流する」に、「職員と交流をする」を「家族と交流をする」に、「利用者の人間関係を大切にする」を「子供の人間関係を大切にする」に、「作業に取り組む」を「家事等の作業に取り組む」に、各質問項目を修正した。

里親 3 名を対象にこれらの修正した 4 項目に入れ替えた 35 項目の質問項目を予備調査として、里子の過ごし方への配慮に対する意識の度合いを問う項目としての適否、および使用するのが適切でない場合の修正文章案を個別に質問した。その結果、3 名からは、35 項目すべての文言を変えずに使用できるとの見解が示されたため、35 項目の文言を変更せずに用いることとした。

里子の過ごし方への配慮に対して意識する度合いを問う独自の 35 項目の質問項目における回答は、「まったく気にしていない」(1点)、「あまり気にしていない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度気にしている」(4点)、「かなり気にしている」(5点)までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1から5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について、「学齢前の里子の養育経験がある」、「学齢以上の里子の養育経験がある」、「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」の3群ごとに、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について、各郡間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がない場合の一元配置分散分析を行った。その後の多重比較については、最小有意差(LSD)法を使用した。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

Ⅲ 結果

里子の過ごし方への配慮に対して意識する度合いを問う独自の 35 項目の質問項目について、分散分析によって、各学部の平均値に有意差が認められたのは、「12. 時間を守る」、「19. できることは自分でする」、「20. ルールを守る」、「33. 余裕のある生活をする」の4項目(11.4%)であった(表1)このため、LSD法を用いた多重比較を行った(表2)。それによって次のことが示唆された。

「12. 時間を守る」、「19. できることは自分でする」、「20. ルールを守る」の3項目については、「学齢以上の里子の養育経験がある」群と「両方の養育経験がある」群間にはそれらの平均値に有意差がなかった。しかし、「学齢以上の里子の養育経験がある」群と「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」群の方が、「学齢前の里子の養育経験がある」群よりも、各々有意に平均値が高かった。里子が学齢以上の場合、学齢前よりも、時間を守る、できることは自分でする、ルールを守るという自立に向けた行動を重視していることが示された。

「33. 余裕のある生活をする」については、「学齢以上の里子の養育経験がある」群と「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」群間にはそれらの平均値に有意差がなかった。しかし、「両方の養育経験がある」群が「学齢前の里子の養育経験がある」群よりも、有意に平均値が高かった。学齢前と小学生以上の両方の子供を養育する経験がある場合、里子が余裕のある生活をするを重視していると示唆された。

これら4項目以外の31項目(88.6%)については、「学齢前の里子の養育経験がある」、「学齢以上の里子の養育経験がある」、「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」の3群間に平均値の有意差は認められなかった。したがって、「学齢前の里子の養育経験がある」、「学齢以上の里子の養育経験がある」、「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」のどの場合でも、里子の過ごし方への配慮に対して同じように捉えている項目は次の通りである。

「1. 休憩を十分にとる」、「2. 水分補給をこまめにする」、「16. 安全な環境にする」、「21. 気候に応じた服を着る」、「23. 体操等の全身運動をする」、「26. ストレスを発散する」、「29. 努めて身体を動かす」、「35. 生活のリズムを整える」のような健康に生活すること、「3. 子供同士で交流する」、「6. 家族と交流をする」、「11. 地域の人と交流する」、「15. 人間関係を築く」、「22. 子供の人間関係を大切にすること」、「30. 他者と協力する」のような対人関係を大切にすること、「4. 和やかな雰囲気過ごす」、「5. 遊びや趣味の幅を

広げる」、「7. ゆっくりと過ごす」、「8. 楽しく過ごす」、「9. 静かに過ごす」、「10. 楽しみを増やす」、「13. 音楽を聴いて楽しむ」、「14. 歌うことを楽しむ」、「17. 興味や関心のあることをする」、「18. 道具を大切に扱う」、「24. 工作等手指活動をする」、「25. 楽器を使った演奏を楽しむ」、「27. 外出をする」、「28. お茶の時間を楽しむ」、「31. 買物をする」、「32. 興味や関心を尊重する」、「34. 家事等の作業に取り組む」のような充実した生活をする事が示された。

表 1 養育里親における里子の過ごし方への配慮に関して意識する度合いについての分散分析

質問項目	学齢前の養育	平均値	標準偏差	平均平方 (グループ間)	F
	学齢以上の養育	平均値	標準偏差	平均平方 (グループ別)	
	両方の養育経験	平均値	標準偏差		
1. 休憩を十分にとる		3.34	1.17	1.04	0.88
		3.38	1.11	1.18	
		3.61	0.98		
2. 水分補給をこまめにする		3.68	0.98	1.16	1.24
		3.40	1.01	0.94	
		3.65	0.91		
3. 子供同士で交流する		3.89	0.87	0.24	0.35
		3.78	0.89	0.68	
		3.76	0.71		
4. 和やかな雰囲気ですごす		3.94	0.98	0.89	1.19
		3.86	0.95	0.75	
		4.12	0.62		
5. 遊びや趣味の幅を広げる		3.91	0.80	0.42	0.59
		3.80	0.90	0.71	
		3.98	0.81		
6. 家族と交流をする		4.21	0.75	0.95	1.24
		3.96	0.90	0.76	
		3.98	0.95		
7. ゆっくりと過ごす		3.55	0.90	0.35	0.41
		3.72	1.03	0.85	
		3.67	0.82		
8. 楽しく過ごす		4.15	0.69	0.75	1.28
		3.94	0.94	0.59	
		4.16	0.64		
9. 静かに過ごす		3.17	0.96	1.19	1.26
		3.48	1.05	0.95	
		3.37	0.89		
10. 楽しみを増やす		4.13	0.68	1.47	2.36
		3.80	0.90	0.62	
		4.06	0.76		

11. 地域の人と交流する	3.55	0.95	0.66	0.78
	3.66	0.90	0.84	
	3.78	0.90		
12. 時間を守る	3.85	0.83	3.49	5.18**
	4.30	0.89	0.67	
	4.33	0.74		
13. 音楽を聴いて楽しむ	3.47	0.88	2.29	2.97
	3.12	0.96	0.77	
	3.51	0.78		
14. 歌うことを楽しむ	3.38	0.92	0.80	0.99
	3.18	0.94	0.81	
	3.41	0.83		
15. 人間関係を築く	4.06	0.64	0.69	1.22
	4.30	0.86	0.57	
	4.16	0.73		
16. 安全な環境にする	4.17	0.79	1.12	2.14
	4.22	0.84	0.52	
	4.45	0.50		
17. 興味や関心のあることをする	4.11	0.79	0.83	1.30
	3.90	0.95	0.64	
	4.14	0.63		
18. 道具を大切に扱う	3.98	0.79	1.66	2.71
	3.98	0.92	0.61	
	4.29	0.61		
19. できることは自分でする	3.94	0.67	1.46	3.15*
	4.24	0.77	0.46	
	4.24	0.59		
20. ルールを守る	4.04	0.75	2.01	3.82*
	4.40	0.78	0.53	
	4.39	0.64		
21. 気候に応じた服を着る	3.96	0.83	0.73	1.18
	3.94	0.91	0.62	
	4.16	0.58		
22. 子供の人間関係を大切にす	4.06	0.82	0.82	1.55
	4.32	0.71	0.53	
	4.24	0.65		
23. 体操等の全身運動をする	3.81	0.80	2.22	2.66
	3.38	1.05	0.84	

	3.59	0.88		
	3.53	0.83	0.81	
24. 工作等手指活動をする	3.28	1.01	0.84	0.96
	3.45	0.90		
	3.26	0.82	2.45	
25. 楽器を使った演奏を楽しむ	2.96	1.09	0.99	2.56
	3.39	1.00		
	3.77	0.73	0.15	
26. ストレスを発散する	3.74	0.80	0.60	0.24
	3.84	0.78		
	3.91	0.72	1.48	
27. 外出をする	3.60	0.90	0.67	2.22
	3.88	0.82		
	3.21	1.04	1.75	
28. お茶の時間を楽しむ	3.02	1.06	0.93	1.88
	3.39	0.78		
	3.74	0.77	1.66	
29. 努めて身体を動かす	3.38	0.99	0.64	2.58
	3.61	0.60		
	3.81	0.83	0.53	
30. 他者と協力する	3.74	0.88	0.66	0.82
	3.94	0.71		
	3.34	0.98	0.77	
31. 買物をする	3.44	0.65	0.85	0.90
	3.59	0.83		
	4.00	0.66	0.25	
32. 興味や関心を尊重する	3.92	0.80	0.50	0.49
	4.06	0.65		
	3.45	0.83	2.01	
33. 余裕のある生活をする	3.58	0.86	0.61	3.29*
	3.84	0.64		
	3.60	0.68	0.28	
34. 家事等の作業に取り組む	3.66	0.94	0.71	0.39
	3.75	0.87		
	4.23	0.60	0.61	
35. 生活のリズムを整える	4.18	0.87	0.48	1.27
	4.39	0.57		

* $p < .05$ ** $p < .01$

学齢前の養育（＝「学齢前の里子の養育経験がある」）

学齢以上の養育（＝「学齢以上の里子の養育経験がある」）

両方の養育経験（＝「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」）

表2 養育里親における里子の過ごし方への配慮に関して意識する度合いに関する対比較

分散分析で有意差が認められた項目	学齢前と学齢以上	学齢前と両方	学齢以上と両方
12. 時間を守る	<	<	n. s.
19. できることは自分です	<	<	n. s.
20. ルールを守る	<	<	n. s.
33. 余裕のある生活をする	n. s.	<	n. s.

不等号： $p < .05$ n. s. : not significant

学齢前（＝「学齢前の里子の養育経験がある」）

学齢以上（＝「学齢以上の里子の養育経験がある」）

両方（＝「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」）

IV 考察

質問項目のうち、「時間を守る」、「できることは自分です」、「ルールを守る」の3項目については、「学齢以上の里子の養育経験がある」場合と「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」場合の方が、「学齢前の里子の養育経験がある」場合よりも、各々有意に平均値が高かった。そのため、養育里親は、里子が小学生以上の場合、学齢前よりも、時間を守る、できることは自分です、ルールを守るという自立に向けた行動を重視している。「余裕のある生活をする」については、学齢前と学齢以上の両方を養育する経験がある場合、里子が余裕のある生活をすることを重視している。これらのことが示唆された。

「温かな家庭的環境である養育家庭にもかかわらず、養育困難になりがちな里子には、他者との関係性を築くうえで不器用な面が認められ、また、困難に立ち向かい乗り越えるためのレジリエンスに弱さがあることが認められた」（中山, 2019）と言及されている。このことは、里子における自己肯定感を形成するための生活経験が不足していることを示しているのであろう。また、里親家庭における支援ニーズについては、多様である。そのため、「支援ニーズ全体をみると、里子との関係性や家族内関係を対象にするだけでは、立ち行かないような複合的な問題も多い。支援には、アタッチメントや心理臨床的視点を含めた多様な視点からのアプローチと、そこに関わる人たちとの協力が欠かせない」（瀬地山, 2022）と主張されている。したがって、養育里親は、学齢以上の里子を養育する場合、その将来の自立を目指して養育することを重視して、日常生活において多岐に亘って配慮をするように心がけているものと判断される。

本調査における約9割の質問項目については、「学齢前の里子の養育経験がある」、「学齢以上の里子の養育経験がある」、「学齢前と学齢以上の両方の養育経験がある」のどの場合でも、里子の過ごし方への配慮に対して同じように捉えていた。それら内容は、健康に生活すること、対人関係を大切にすること、充実した生活をするのであった。「養育里親には、里子に対して広く配慮しながら接する傾向があり、実親と変わらない姿勢で里子を養育している。また、「わかりやすい接し方」、「気持ちを受け入れる接し方」、「社会性を育てる接し方」、「自発性を高める接し方」の視点から、これらに関連させながら接するように心がけている」（松山, 2020）と論及されている。この見解からも、養育里親における里子への養育に関する認識は、里子が学齢前か学齢以上かに関わらず、健康に生活すること、対人関係を大切に

にすること、充実した生活をする事のような、日常生活や社会生活に関する多くの事柄については、同様であるものと推察される。

以上のように、養育里親は、里子の日常生活への配慮に対して、学齢前か学齢以上かに関わらず、里子に対して、健康に生活すること、対人関係を大切にすること、充実した生活をする事、について同様に配慮していた。しかしながら、里子が学齢以上の場合、日常生活における日々の配慮に加えて、将来の自立も考慮した配慮を心がけていることが明らかになった。

今後、本研究で明らかになった事柄を、里子の健やかな成長に役立てるためには、養育里親が里子に対して、日常生活の中で、具体的にどのような働きかけを心がければよいのかについて、明確にすることが課題である。

V 結 論

本研究では、養育里親における里子の日常生活への配慮に対する認識を明らかにすることを目的として、養育里親に対して、独自に作成した無記名方式による質問紙調査を実施した。養育里親は里子が学齢以上の場合、学齢前よりも、時間を守る、できることは自分でするルールを守るという自立に向けた行動、里子が余裕のある生活をする事、将来の自立を目指して養育することを重視して、様々な配慮を心がけている。また、養育里親は、里子の日常生活への配慮に対して、学齢前か学齢以上かに関わらず、健康に生活すること、対人関係を大切にすること、充実した生活をする事、について配慮するように心がけている。以上のことが示唆された。

謝 辞

調査に際し、ご協力いただきました都道府県指定都市の里親会と所属されている里親の皆様に、深く感謝申し上げます。

引用文献

- 二村玲衣 (2022) 「里親だより」からみる全国里親会による里親支援の展開：教育福祉に位置づく支援活動に着目して. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 教育科学, 68(2), 95-105.
- 井上寿美・笹倉千佳弘 (2022) コロナ禍における A 県の里親養育と里親支援専門相談員の活動. 大阪大谷大学紀要, 56, 11-25.
- 石井陽子・富田早苗・波川京子 (2021) 地域里親会の現状と課題—地域里親会と養育里親の調査から一. 川崎医療福祉学会誌, 30(2), 589-596.
- 木村容子 (2007) 子どもの福祉の視点に立つ里親制度のあり方に関する検討. 京都光華女子大学研究紀要, 45, 329-348.
- 松山郁夫 (2020) 養育里親における里子への接し方に対する認識. 佐賀大学教育学部研究論文集, 4(1), 181-190.
- 三輪清子 (2020) 里親家庭の「おわかれ」にかかわる 3つの視角. Journal of Welfare Sociology, 17(0), 31-50.
- 中山哲志 (2019) 養育困難な里子と自立支援 (特集 インクルージョンにおける後期中等教育のあり方). 発達障害研究. 41 (1), 38-45.
- 大日義晴 (2020) 里親にとって里子は「家族」か?. 家族社会学研究, 32(1), 33-46.

- 佐藤みゆき・松澤佳奈 (2017) S市における重層的里親支援：養育里親へのインタビュー調査から.
名寄市立大学社会福祉学科研究紀要, 6, 65-79.
- 澁谷昌史・才村純・庄司順一・小山修・斉藤進・安藤朗子・有村大士・伊藤嘉余子 (2004) 里親制度の
現状と課題(5) 専門里親及び親族里親の実態と課題に関する研究. 日本子ども家庭総合研究所紀要,
41, 43-61.
- 瀬地山葉矢 (2022) 里親への心理的支援—アタッチメント理論に基づく支援を中心に—. 日本福祉大学
子ども発達学論集, 14, 1-9.
- 瀬下裕紀子 (2000) 里親政策の現状と課題. 暁星論叢, 47, 39-70.
- 山縣文治 (2011) 里親等制度等の状況と社会的支援 (特集 児童虐待と社会的養護). 臨床心理学, 11(5),
671-676.
- 米山宗久 (2022) アドボカシーの視点による里親制度の必要性と課題. 長岡大学研究論叢, 20, 33-54.